

son: Journ. Chem. Soc. **127**: 1135, 1925. 3. A. Leon & R. Robinson: Journ. Chem. Soc. **132**: 2732, 1931. 4. 服部静夫: 植物色素, 1941. 5. 岩本熊吉: 花色図鑑, 1942. 6. 林孝三: 植物色素実験法, 1954. 7. 佐竹一夫: クロマトグラフィー, 1955. 8. J. B. Harborne: Biochem. J. **70**: 22, 1958. 9. ———: J. Chromatog. **1**: 473, 1958. 10. Yuk Lin Ng & Kenneth V. Thimann: Archives of Biochem. Biophys. **96**: 336-339, 1962. 11. 志村義雄: 植研 **41**: 237-244, 1966.

### Summary

The present paper deals with the qualitative analysis of red pigment appearing in *Azolla imbricata* (Roxb.) Nakai. The qualitative analysis was carried out by the method of the four kinds of experiments (A, B, C, D). As the results of the experiments, the red pigment of the species belongs to anthocyanin and the two kinds of aglycone are found in the red pigment, one of them is surely cyanidin and the other seems to be luteolinidin.

□福岡県帰化植物研究会: 帰化植物図譜 pp. i~vi, 1~292, 索引 1~8, 口絵 4 (内カラー 2), pl. 133, 図 5, 表 3, ほかに小型分布図 38, 第一学習社, 1967年6月, ¥1,600. 福岡県産の材料を用いて187項目の種, 変種などにまとめ, さらに7変種を関係のある項目に加え, これらを133の図版におさめた。久内清孝教授の「帰化植物」1950年以後この種のはじめての単行本。著者らは現在の日本の帰化植物の数を430ぐらいと推定しているが, 福岡県におけるものに限る, かつ帰化植物の範囲をより厳密にとった。1章, 帰化植物に関する諸分野の話題。2章, 県産のものリスト。3章, 各論, 本著の主要部で (pp. 24~269), 本文は形態のほかに「帰化状況」の項目をもうけて, 分布の歴史, 生態, 時に異説の紹介もあり, 末尾に主要な日本の文献を各項目ごとに加えた。同属の各種の検索表もある。図版は多くは部分図を伴っていて明快である。7種の新和名があり, 4種は日本での新報告。4章, 北九州における帰化植物の侵入繁殖の状況。5章, 101名からのアンケート回答による全国的な分布調査が図を伴って一部紹介された。16人の先生方による約5年をかけた労作で, そのチーム・ワークによって本書ができた。全国共通, 特に大都市に共通のものが多く帰化植物のことであるから, この好著が多くの愛好者, 研究者に大きい利益をもたらすことは間違いない。

(津山 尚)